

先週は「施し」の問題について学びました。今日は「祈り」についての問題であります。先ず、イエス様はこのように言われます。「祈るときにも、あなた方は偽善者のようになってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。」

この言い方は、先週学びました「施し」について語られた言い方と全く同じであります。2節の所にはこのようにありました。「あなたは施しをする時には、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなた方に言っておく。彼らは既に報いを受けている。」で、この2節にも、今日の所にも出てくる「偽善者」(ヒュポクリテース)。これについては先週もお話しましたけれども、もともとこの言葉は、俳優、役者、人に見られることを仕事とする人たちのことなっておりますね。ですから、彼らは「人に見てもらおう」ことを喜びとする、また、願わくは「人からほめてもらおう」という、そういう人たちである訳であります。で、イエス様が「あなた方は偽善者のようになってはならない」という時、それは人の目や人の評価を気にするのではなくて、むしろ、神さまにどのように評価してもらおうか、そういうことを問題にしないで勧められている訳であります。まあ、こういう事については、先週既に学びましたので、今日は「祈り」について、イエス様が教えようとしておられることを考えてまいりたいと思います。

ところで、今日のこのイエス様の「祈り」についての言葉ですけれども、これはやはり当時の社会状況なり、生活状況なりが分からないと少し戸惑うと思うのであります。というのは、イエス様がここで批判しているのは、祈りをする人たちについてであるからであります。祈る人たちが批判されている。「会堂や大通りの角に立って祈りたがる人」、また、7節の所には「あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない」とありますけれども、いずれも「祈る人」のことが問題とされている訳であります。

フォーサイスという人は、私たち人間の「最大の罪は、祈らないことである」ということをおっしゃいます(「祈りの精神の冒頭」)。「祈らないことが罪」、なんとなく分かるような気もするのではないのでしょうか。祈りもしないで、私はクリスチャンですというような人がいる。そして、困った時だけ「苦しい時の神頼み」ということで祈るけれども、自分の願いがかなえられないと「神も仏もあるものか」と信仰を捨ててしまう。そういう人も案外多いのではないのでしょうか。お祈りは、私たちと神さまとの交わり、対話の場であり、神さまとの絆を、そこで保つものでありますから、お祈りをしないと、神さまとの関係も疎遠になり、薄れてしまい、終いには神さまのことが分からなくなってしまうのであります。ですから、そういう意味では、人間の「最大の罪は、祈らないことである」という言葉も分かるような気もする訳であります。

しかし、イエス様は、今日の所では、祈らないことよりも、むしろ「祈る人たち」のことを問題にしている訳であります。これはどういう事なんでしょうか。

「会堂や大通り」で祈る。あるいは、「くどくどと」祈るかどうかは別にしても、とにかく「祈る」ということは、これは「いいこと」ではないのでしょうか。どうして、祈ること

を問題としているのでしょうか。これは当時のユダヤの社会のことをよく知らないと、理解しにくいかも知れません。当時、ユダヤの社会では「祈ることは生活の一部」でありました。彼らは、午前9時、正午、そして午後3時と一日3回お祈りしたんでありますね。その他、安息日の礼拝の時やいろいろなお祭り、祭日なんかにもお祈りをしました。イスラム教では、一日に5回、メッカの方に向かって祈りますけれども、ユダヤ教の場合は、エルサレムの方を向いて、エルサレムにいる人は、神殿のある丘の方に向かってお祈りします。ついでに言えば、イスラム教では、祈るとき、頭を地面につけて祈りますが、ユダヤ人は、立って祈ります。今日の聖書の所にも「会堂や大通りの角に立って祈りたがる」とありますけれども、彼らは立って祈る習慣がありました。ここから「祈り」のことを「アミダ」と言う訳であります。「アミダ」というのは「立つ、起立」という意味の言葉でありますけれども、立って祈るので、ユダヤ人はお祈りのことを「アミダ」と言っております。

とにかく、ユダヤ人は「祈ることが生活の一部」であった人たち、今でもそうであります。ですから、祈らないという事は問題外だった訳ですね。祈るのが当たり前の世界。日本でも昔は、毎朝仏壇や神棚に手を合わせるとか、供え物をするとか、よくやりました。でも、最近あまりそういう事をしない、そういう人たちが増えて来ております。宗教は違っても「祈る」という姿勢はやはり大切だと思うのですけれども、最近はどうも「祈る人」が少なくなって来た。ですから、イエス様が「祈らないこと」よりも、むしろ「祈る人たち」のことを問題にしている、こういう箇所に出会いますと、違和感を覚えるという人もいると思うのですけれども、今申し上げましたような、「祈ることが生活の一部」であった、そういう社会、祈るのが当たり前であった世界のお話でありますので、そのことを先ず踏まえておいていただきたいと思います。

ということで、イエス様が問題とされている「祈り」についてですが、イエス様は「会堂や大通りで、人に見てもらおうとするような、そういう偽善者がするような祈りではなくて、むしろ、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父（神様）に祈りなさい」と勧める訳であります。「そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」。

ここにあります「奥まった自分の部屋に入って戸を閉めて祈る」というのは、よく「密室の祈り」と言われます。当時、自分専用の部屋なんか持っているのは、貴族や豪族ぐらいな者でありまして、普通の家には「自分専用の部屋」なんてなかったと言われております。ですから、ここで言われている「自分の部屋」というのは、当時の農家などによくあった納屋とか物置のような、そういうものではなかったかと言われてたりしておりますけれども、それはともかくとして、イエス様が言っておられるこの「密室の祈り」、これはどういうことなのでしょう。

「奥まった自分の部屋に入って戸を閉めて祈る」。これは、一言で言えば、人に見られないということでありましてね。あの人は祈っている、そういう姿を人に見られないということ。言い換えれば、人の目、人の評価を受けないということでありまして。先週も学びましたけれども、当時は、施しをしたり、祈ったり、また、このあと出てくる「断食をしたり」というのは、みんなが「立派な行為である」と認める事柄であった訳でありますね。でも、イエス様は、そういう人が認める「立派な行為」というものは、「あの人は立派だ、すばらしい」という評価を受けたとき、もう既にその報いを受けてしまったと言う訳であります。お祈りも正にそう。「あの人は祈っている、すばらしい」という評価を受けた時、

すでにその祈りは報われてしまっているという訳であります。ですから、イエス様は、人に見られないように、人の評価を受けないように、密室で祈ることを勧める訳であります。しかし、この「密室の祈り」「奥まった自分の部屋に入って戸を閉めて祈る」というの、単に、人に見られないというだけのことなのではないでしょうか。これも先週学びましたけれども、イエス様は「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない」と教えられたのでありますね。施しという愛の行為、それは、自分でも気が付かないような、そういう行為であるべきだと言うのであります。とするならば、祈りにおいても、同じことが言えるのではないのでしょうか。自分の祈りに対して、自分はこんなに祈っていると、こんなにも祈れるようになったとか、そういう評価をするとき、それは本当の祈りになっているのでしょうか。人からは見られないようにしているけれども、人の評価は受けないけれども、自分で自分の評価をしているのでは、これは結局同じではないのでしょうか。イエス様の教える「密室の祈り」、それは、人からも、また、自分でも、それに対して評価しない、そういうものではないのでしょうか。神さまだけに目を向け、心を向け、素直に心を開き祈る、そういう祈りこそ、神さまが報いてくださる祈りなのではないのでしょうか。今日の所にも「隠れたところにおられるあなたの父」とか「隠れたことを見ておられるあなたの父」という言葉が出てまいります、この「隠れた」という言葉の意味はやはり大きいと思います。私たちは目に見えるものに捕らわれ、また目に見える評価を気にしますが、神さまは、目に見えないもの、隠れたものを評価するお方なのであります。そういう意味では、パウロが「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」(2 コリント 4:18)と言っている、この有名な言葉は大切だと思えます。

それでは、次のイエス様の言葉ですけれども、続いてイエス様は、このように言われました。7節以下「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思込んでいる。6:8 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」。

ここには「くどくどと祈るな」という事が教えられておりますけれども、この「くどくど」というのは、どういうことなのでしょう。当時の人たちの中には、自分たちの知っている神の名をつぎつぎと挙げて祈ったということがあったそうであります。どうしてそんなことをするのかと言いますと、沢山の神の名はあるけれども、どれが本当の神の名なのか、どれがこの場合あてにしてよい神なのかよく分からない、そういう時、知っている限りの神の名を呼べば、どれか一つぐらいは当たっていないかと思う訳であります。三浦綾子さんの「海嶺」という歴史小説の中にも、船が嵐にあって沈みそうになった時、船乗りたち(水主)が、自分たちの知っている神の名をいろいろと叫ぶ、熱田神社の神だとか、金比羅さんの神だとか、近くのお社の神だとか、いろいろ叫ぶ、そういう場面が出てくる訳ですけれども、いろいろな神の名を呼べば、どれか一つぐらいは当たっているかも知れない、助けてくれるかも知れないという、そういう気持ちも分からない訳ではありません。でも、本当の神さまというのは、天地を創造された創造主ただお一人であります。祈りとはちょっと違うかも知れませんが、内村鑑三は、少年時代に洗礼を受けた時、こんなことを言ったそうであります。「もうあっちの鳥居、お社、地蔵さん、お寺などなどで一つ一つに頭を下げてお参りしなくてもいいんだ、イエス様だけでいいのだから、これはいいや」と無邪気に喜んだ、という事があります。どれが本当の神さまなのか分からなけ

れば、あっちにも頭を下げ、こっちにも頭をさげなければならない。お祈りでも、こっちの神さま、あっちの神さま、いろいろな神さまの名を挙げなければならない。これはとても大変であります。でも、本当の神さまが分からなければ、そういう事も仕方ないのであります。イエス様當時も、いろいろな神の名を次々と挙げてくどくどと祈った、そういう人たちも実際にいたようなのであります。でも、ここでイエス様が「くどくどと祈るな」というのは、ただ単にそういう、いろいろな神さまの名をひっぱりだして祈るという事だけではありません。聖書の中には、バアルの預言者たちは、「朝から真昼まで、半日も、バアルの名を呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈った」という話もありますし(列王紀上 18:26)、また、エフェソの群衆は「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と二時間ほど叫び続けた(使徒 19:34)というようなお話も出てまいります。で、このように「くどくどと祈る」祈りは、異邦人の特徴かも知れませんが、実は、ユダヤ人だってくどくど祈っていたのであります。例えば、ユダヤ人は、申命記の6章4節以下にある「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。6:5 あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という言葉を繰り返し唱えていました。「聞け、イスラエルよ」(シェマー イシュラエール)という、この最初の言葉から、これは「シェマー」と今でも呼ばれておりますけれども、ユダヤ人だって「くどくど祈っていた」。

しかし、イエス様は言うのでありますね。「彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」。この言葉は、何を語ろうとしている言葉なのでしょう。一つははっきり言えることは、私たちが何を祈ろうが、どんなふうに祈ろうが、神さまは「私たちに必要なものをよく知っておられる」ということでもあります。「願う前から」とあります。私たちが祈る前から、神さまは「私たちの必要なもの」をちゃんとよく知っていてくださるのであります。これはありがたいことではないでしょうか。

それでは、神さまは私たちが祈る前から、必要なものを知っておられるのならば、私たちは祈らなくてもいいのでしょうか。そんなことはないと思うのでありますね。今日最初の方でお話しましたけれども、「祈り」というのは、神様との交わり、神様との対話であります。いつも神様と交わっておりませんと、やはり疎遠な関係になってしまうのであります。ですから、やはり祈らなければならない。でも、祈れない場合だってあるのではないのでしょうか。祈りたくても祈りの言葉が出てこない、そういうことだってあると思うのであります。そのために、イエス様は次の「主の祈り」というものを教えられた訳ですが、これも、これは来週学びたいと思います。

とにかく、祈るということ、これはとても大切なことであり、祈らなければなりませんけれども、イエス様が注意されているように、人の評価や、自分の評価、そういうものを気にせず、また、くどくどと言葉数を多くするのでもなくて、素直に神様に心を開き、祈って行ければと思います。

それでは、最後に私たちはどんな祈りをしたらいいのか、ちょっとだけ触れておきたいと思います。イエス様はこんな「たとえ話」をされました。これはルカ福音書の18章9節以下にある「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」というお話ですが、こんなお話であります。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対して」、イエス様はこんなたとえを話されました。

18:10 「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。18:11 ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わ

たしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。18:12 わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』

18:13 ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』

18:14 言うておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。

ここに登場する徴税人の姿、そして、彼の祈り、これこそ、今日イエス様がイエス様が教えられたことを実行しているよい例ではないでしょうか。徴税人は、くどくどと祈りません。ただ「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と祈っただけであります。また、人に見られないような「遠くの方に立ち、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら」祈る姿は、正に「密室の祈りそのもの」と言ってもいいと思います。

聖書には、ちゃんと参考例も挙げられている訳ですから、どんなふうに祈ったらいいのか、どんな祈りをしたらいいのか、一人一人自分なりに考えて、祈りの生活を続けていければと思います。